連載

新 ああ、猪猟 泣き笑い

新たな狩猟人生の旅立ちに

③ ローマは1日にして成らず(2)

川崎市 田宮 治

訓練は「つなびき」が全てである

◎天性の猟芸こそ…

猟人生で忘れられないものがあるとすれば、まず一番にその時々の想いである。そこにあるのは、すばらしい猪との攻防の姿であり、やってくれた愛犬達との想いである。

真剣勝負の中で、大猪をものともしない咬みこみは野武士の様ないぶし銀の味がある。天性の猟能が目いっぱいにひき出された猪犬が「キラリと光る瞬間」。このキラリと光る芸をひろいあつめ、つなぎ合わせる様な考えで、既存犬とは一味も二味もきれ味の異なる猪犬をつくろうと渾身の力で頑張って来た。

具体的には50歳では猪を止める場所が一山くらい越えても良いと思っていたが、60歳では「せめてすぐ下の谷で止める様に」、70歳になった私の猪犬は、「寝屋でそのまま止め、撃たせてくれる」そんな事を目標にしてやっている。

車を止めた所より、全犬を放して狩り進むのであるが、当然の事「犬見切り」である。体力に合わせて最短距離の山登りで事たりる様に仕上げている。それでなくては一人で猪はとれないと思うからである。「良い犬」と「良い犬」との交配と言う意味も前述の様に実戦で猪との攻防の中で見せる芸をこまかく分析。

たとえば、飛ぶように逃げる猪にギッギッと鳴きながら咬みこむ。早い足があり、咬みこんでは離し、また咬みこむ。必要な攻めで決して猪を「ノテ」にのせない。そんな「牝犬」に、咬み一番で咬みこんだら、ぴたっと猪に体をよせて決して離さない「牡犬」を交配するとか…。

また寝屋鳴き(よせなき)をきちんとこなし追い鳴き、止めなきと撃ちとるまで「鳴きがとぎれない牝犬」と「先犬の頭の良い牡犬」を、と言う具合にあくまで自分の目で見て、わかっている芸をうまくからませ、さらなる見事な芸が生まれる様な子犬作りであって、その次元の「良い犬」と「良い犬」を言っているのである。

私の場合は、それに加え「礎材犬」を求めた時点で、全国の達人達が人生をかけて作り上げた「すでに猪犬」だったのである。その「礎材犬」をさらなる猪犬に作るべく前述の様にこだわり続ける事「8代」。やっと自分に合う納得の猪犬が出来たと思っている。その猪犬50～60頭の中でも私がその猟

芸に惚れ込み使っている一軍犬15頭位を子犬作りに使っているのが現状である。

1頭や2頭の犬から選んだ「良い犬」では、確かにおちこぼれの子犬が出来たり、ばらつきはあろうけれど、すでに出来上がった猪犬の、たとえば「足とり(足や手に必要に咬みこむ)の名犬」や「鳴きの決してきれない犬」、「がぶりと頭にいく、咬み一番の犬」、「頭の良い一流の先導犬」、「足が飛ぶ様に早い犬」。こんな一軍の犬群の芸を、どうしても欲しい「一芸の猪犬」を作る為に使っているのである。

天性のすぐれた猟能とか、すばらしい個性などと言うものは、どんなに訓練しようとも出来上がるものではない。「天性の猟芸」こそ、この様な交配でのみ生まれるのである。そして天性の猟芸をのばし一流芸にするのが訓練と言う事である。ただ訓練はその犬が持って生まれた「天性の素質を目一杯のばしてやる事」であるが、それさえも限界がある。その限界とは、その個体がもつ天性の狩猟本能がどれだけあるかで決まる。

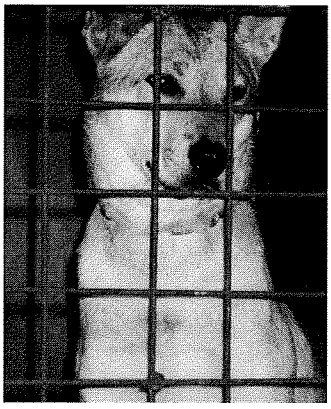
訓練は猟人の猟技術や努力によるところも、大きくものを言うのであるが、作る側からすれば「みがけば必ず光ると確信のもてる」「かぎりなく狩猟本能のつまった」そんな「究極の猪犬を作る」のが繁殖者としての使命だと思っている。そして一番目の関門は、交配する事で出来た子犬を必ず自分で引いて仕上げて見る事である。それこそ時間をかけ、子犬作りも含めて「プラン」「ドウ」「チェック」の連続となる。どんな事があっても決してあきらめない事が大切である。

人間だれでも身勝手なところがあって、悪い結果は人のせいにしたがるので、自ら子犬を仕上げその結果を検証して見る事である。良い猪犬になったらその過程をしっかりと記憶し、悪い場合は原因を徹底的に究明し修正することが必要。子犬をひきとって育ててくれる猟人が、みなよろこんで使ってくれる納得の猪猟が出来る様にしたい。

私はこんな事で「我が傑作犬」を毎猟期5～6頭は引き続き仕上げている。この様に「究極の猪犬」を作るのも、育て仕上げるのも、全て自分の力でやりぬく事。自らの猟技術を信じ愛犬を信じ、高い目標をかかげその実現に挑み続ける。いろんな意味からも極める過程が重要であり、楽しいものでもある。

そんな中でも一貫して守らなければならないのが「自説をおし通す根性」と「自らの目で見て選んだ礎材犬」だけは、決してとりかえてはならない。この基本を忘れてしまったら何もかもバラバラになり、とても集結はむずかしいと思うのである。

種牝「ブル号」



種牡「富士雄号」

◎田宮系猪犬

達人は猪猟を極める為に猪犬を作り、それぞれの名前をつけ他犬と区別している。だれだって純粋の既存犬で事たりるのであれば、これを使うのが一番良い。安あがりであり、手っ取り早いのである。

しかし猪猟を極める中で使っている犬の猟芸に限界を感じ、不満に思ったからこそ自分に合った猪犬を作り、それを守っていく為に自らの名前をつけたのだと思う。あらゆる努力と苦労の結集をせめて名をつける事で、『猪猟の専用犬』として後世に残してゆきたいのだと思う。

達人でも何でもない私がどうして猪犬にそこまでこだわるかと言えば、それはただひとつ『一人でとれる犬が欲しい』と言う事であった。その原点がどんどんふくらんで、こんなになってしまった。それが真実であるが、それもこれも私の心に宿るそれこそ生まれもった性分からである。だから他人が『純粋犬が良い犬で守ってゆきたい』と思うのであれば、それはそれで結構。おおいにやれば良いのであって、ただ言い置きたいのは、私は『目先の事にとらわれて

猪犬を作っている』のでも『犬芸をおとすために雑種犬を作っている』のでもない。『欲しい』『必要な犬』だと思うから『もっと良い猪犬を作ってやろう』と、やって来たのである。思い込みこだわり続けること『8代』にもなるのだから目先の事ではないと思う。

猪犬を作るといっても牝の仔犬を育て、ただの仔犬を生ませるだけでも2年はかかる。その仔犬を仕上げてみて検証するのに少なくても2年。かろうじて結果が見られるまでに4～5年はかかるのである。この様に長い年月で猟能も向上したし、体型だって立派なもの。自分では完成したと思っている。猟ひとすじ50年になってやっと思いが叶った。

猪犬の体重についても、牝犬で17kg～20kg、牡は20kg～25kg位である。猪猟では、どんなに俊敏な犬でも10kgでは小さすぎ、鳴き止め犬でもむずかしいと思う。さりとて30kgでは大きすぎ、やぶぬけもままならず、猪との攻防での受傷が大きくなる。

『猪犬感』もまた人それぞれであろうけれど、それはそれで良いと思うが、私はその様に考えている(体重はこの猪なら何頭かけるかで重要である)。私はくり返し申し上げている通り『俺流の犬作り』であり、『俺専用の猪犬』が完成したと思っている。

あくまでもこの辺の事を苦労話も含め長々と述べさせて頂いているのであるが、この中での『猟犬感』はあくまでも一流芸の『猪犬』についてである。狩猟の場における猪犬芸については、以前本誌で述べさせて頂いた通りである。

猪のおこしから始まって、寝屋鳴き(よせなき)、猪が逃げ出せば追鳴き、ギャッギャッと逃げる猪に咬みこむ口かけ攻撃。止め鳴き、からみ鳴きと絶対に鳴き声がきれない事。寝屋でそのまま止めるか、遠くてもすぐ下の谷で止める様な止め芸、そして逃げられたときでも必ず『放犬場所』にもどること。それと民家におりて悪さをしない事とか、他犬とケンカのない様な猪犬でないと安心して猟が出来ない。そんな犬芸が必要だから作って訓練し、仕上げているのだ。

こんな一流芸も含め、その完成具合も人それぞれであるが、少なくとも我が名をつけて他犬と区別するからには私もまた、猪犬に私なりの味付けをし、私にしか出来ない私の猪犬であり、一味も二味もきれ味の異なる独特の犬芸をみせつけてくれている。

私はこの犬達にかけているし、まさに「一流の猪専門犬」であると思う。その猪犬を守り、後世に残していきたいと思っているのである。私は、並みの犬芸をもって『良い犬』とは言わない。『田宮系猪犬』と言うからには『既存犬種を超えた一流の猪犬』であると思っている。

当然の事、㊙事項は抜きにして『既存犬』を自分にあう猪犬にする為に、味付けするのであるから血統書はなくなる。しかしそんな事より、はるかに大きな猪に対する猟能を優先させたのである。

この様にして『究極の猪犬』を作るのも育てるのも全て改良、開発の域。やって来た自らの猟技術を信じ、愛犬を信じ、守りぬき、やりぬく事だと思う。そんな頑張りが、やがて認められ猪猟を最高のものとし、猟友の絆もだんだんと強くなり広がっていくのである。

すばらしい猪犬の縁で共猟し、楽しい納得の猟が出来れば、それこそこの上ない喜びだと思うのである。はばかりながら、私の一軍の犬群は百戦錬磨の猛者ぞろいで、どこに出しても恥かしくない一流芸である。そんな自信のある愛犬でなければ、仔犬をとって見たくなるはずもないし、ましてや人様に譲る事も出来ない。

折しも平成19年1月21日付の読売新聞に来月発表予定の『馬ゲノム解読』の記事が出ていた。遺伝の全体情報が人間や牛、そして犬とか細菌に至るまで、明らかにされようとしている。

しかしこんなすばらしい研究は当然の事、個人の力など及ばない『米国立ゲノム研究所』が20カ国共同協賛を得てはじめて出来る事

である。それでさえ研究はまだ10年位であり、前途多難の様である。いずれすっきりした形で証明される事であろうけど、事、生命の起源を解明しようと言うのであるから大変な事である。しかしこれらの、国を挙げての最新技術も、改良種を作ろうと言う事も、いきつく所はやっぱり『採算』と言う事になると思う。

人間に対する研究以外は、当面『競馬』についてであると言われているが、ご承知の通り競馬界の駿馬は1回の種付け料が数千万円で、その馬の生涯でかせぐのが数百億円と言われている。そんな中での『馬が早く走れるのはどうしてであるか』また『特出した早く走れる馬をどうしたら簡単に作り出せるか』と言う事である様だが、どんなに苦労しても、なんの見返りも望めない猟犬の世界に、はたしてその最先端の技術がおよぶのか、いささか心配しているところである。

私のぼやきかも知れないが、どんなに苦労して頑張って作った仔犬でもせいぜい10万位である。毎日ビタワン2袋半とカンツナ5缶である。せめて売りたや愛玩犬の仔犬値くらいで…。そのうえ愛玩犬ならば、猟芸などの心配も全くない。そんなのは、苦労だけで採算がとれない話で、しかも猟芸は奥が深い。そんな世界に『ゲノム』が生かされるのであろうか？『ただ早く走るだけの研究ではない世界に』である。

とにもかくにも早くそんな日が来るのが楽しみである。その日が来れば私の人生も変わると思うし、やっとそんな苦労から解放されるのかも知れない。うれしい様な、悲しい様な…ともかく人生で採算など考える事は淋しい事である。

左、種牝「クロ号」と一軍入りの「サブ号」1歳

狩猟写真 大募集!!

あなたの写真が「狩猟界」誌に掲載されます。

＜テーマ＞

狩猟に関するものであれば，ジャンルは問いません。

●猟犬写真　●射撃写真　●狩猟スナップ　●私の愛銃　●猟場風景
●ゲーム写真　●私の猟仲間…等々。　■表紙写真（カラー）

＜応募規定＞

写真はカラー，モノクロどちらでも可。ただし，表紙写真はカラー。大きさは手札サイズ（105×80ミリ）以上。写真の裏または別紙に簡単な解説を添えて，住所・氏名・年齢・電話番号を明記の上，下記までお送りください。なお，写真の返却はご容赦ください。

＊採用分につきましては，掲載誌と薄謝をお送りさせていただきます。

狩猟の記念と思い出に，是非ご応募ください。

＜送り先＞

〒101-0054　東京都千代田区神田錦町1—21　宗保第一ビル5F

㈱狩猟界社　編集部　宛